

片岡 春雄

北海道寿都町長

10月2日

「核のごみ」処分場選定問題 賛否の中、町長は「突き進む姿勢」

原発から出る高レベル放射性廃棄物(核のごみ)の最終処分場の選定プロセスに、北海道寿都町が10月9日、応募した。手続きが進めば、同じ日に受け入れを表明した北海道神恵内村とともに国内で初めて選定の調査が始まる自治体となる。

オンライン会見は、応募のちょうど1週間前に開かれた。言葉の端々から、片岡春雄・寿都町長が既に腹を決めていたことがうかがえる。

ふるさと納税と町営の風力発電で歳入を伸ばしてきた実績を踏まえ「環境に優しいまちづくりを進めてきた寿都町だからこそ、核のごみに一石を投じて全国的な議論の輪を広げると応募の理由を説明した。



選定プロセスは、①論文などに基づく2年間の「文献調査」②ポリングを伴う4年間の

「概要調査」③地下施設を設ける14年間の「精密調査」と20年に及ぶ。交付金は①で最大20億円、②で最大70億円が得られる(③は未定)。片岡町長は、新型コロナウイルスで打撃を受けた地域経済に不安を抱き、「将来に向けて20億円を有効活用できるよう投資したい」と語った。

反対を明言する鈴木直道・北海道知事に対しては「(北海道電力)泊原発がありながら、核のごみは北海道にいらぬという議論そのものが違うのでは。まず勉強しようというのが私の考えだ」と反論した。

人口約2900人の町内には、応募の賛否を問う住民投票を求める声もあるが「過半数以上の賛成をいただいていると肌で感じる」。応募後は「核のごみを受け入れるかは今、決めるべきではない」としつつ「概要調査まで行くべきだ」と述べた。

神恵内村については「仲間ができてよかったと心底思う」。そのうえで「数十カ所は手を挙げないと安全な所は分からない」と話した。

応募検討を表明してから2カ月。反発の声をよそに、突き進む姿勢は全く変わらなかった。

朝日新聞社北海道報道センター

伊澤 健司

「次の10年 若手政治家に問う」⑦ 秋本 真利

衆議院議員
自由民主党

10月6日

菅氏は「親父」、河野氏は「兄貴」 脱原発・再エネ拡大を熱弁



菅義偉総理の誕生で注目された無党派・非世襲議員集団「ガネーシヤの会」のメンバーで、秘密のベールに包まれた会の内情を語ってくれる議員として知られるようになった秋本議員だが、今回初めて、自身の考え・政策を聞くことができた。

千葉県富里市で市会議員を2期8年務めた秋本議員が国政に出るきっかけになったのは、河野太郎氏との出会いだった。市議の傍ら通った母校・法政大の大学院で、特別講師として授業した河野氏が出した核燃料サイクルについての問いに完璧に答えたことで、河野氏の目を引き、国会議員になるよう勧められたという。そして国政に出た秋本氏は、菅氏に「君、法政だね」と声をかけられ、

勉強会に参加することになった。これが「偉駄天の会」「ガネーシヤの会」へと続く。

秋本議員いわく、菅総理が「政界の親父」で、河野大臣が「政界の兄貴」と、今最も旬な2人に引っぱり上げられた面白い存在だ。

その兄貴分である河野氏に「ひとつ政策を極めたほうがいい」とアドバイスを受けた秋本議員は、大学院で勉強したエネルギー問題に取り組むことに決めたという。自民党では珍しく「脱原発」を掲げ、再生可能エネルギーの拡大を訴えている。

「将来の日本人のためにも再生可能エネルギーは伸ばしていかないといけない」「10年以内に最低でも40%にしたい」と力を込めて語った。

揮毫には「先憂後楽」と記した。「為政者たる者、民より先に憂い、楽な思いは民より後にしろ」と。「安い電気を使えばいいというのではなく、50年後の日本人に感謝してもらえる電源を選択して、普及拡大を図っていききたい」と語った秋本議員。ぜひその思いを忘れずに、改革派、環境派議員としての活躍を期待したい。何かと悪評のほうが目立つ「3回生」の中に、キラリと光る原石を見つけた思いがした。

テレビ朝日政治部長 足立 直紀